
あの空の下で

風音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの空の下で

【Nコード】

N4125B

【作者名】

風音

【あらすじ】

海と山に囲まれた千波市。荒んだ心を持つ桧原恵と、その心を判ろうとする柳緑慎が紡ぐ物語。

「震災の傷跡」 (前書き)

千波市物語第一弾。

今回は、軸となる二人の物語です。

「震災の傷跡」

空は青く、高い。

つい昨日のことのように思われる夏休みからもう二週間が過ぎている。

九月中旬。千波市千波高校二年C組出席番号三十六番柳緑慎は教室で一番窓側の列の前からよつつめの席で生物の授業を聞き流していた。

頬杖について窓の外に広がる青空を眺めている。
暑い。

夏休みが終わったからといって夏が終わるわけではない。もう少し経てばこの日差しも睡眠を誘発する心地よい暖かさを提供してくれるだろうが、今はただ過ぎ去る夏の余韻をひたすら感じさせるだけであった。最も、夏休みの猛暑に比べると、今の暑さは尻尾のようなものだから問題なく耐えられる。むしろ楽しんでやろうとも思う。

これから落ちていく生物の成績を気にさえしなければ、ただただ平和な時間になるはずだった。

突然、隣のクラスで乱暴に机を動かす音がした。続いてドアの開く音、こちらのクラスとは反対側の廊下を走っていく足音。爬虫類を連想させる顔をした生物教師は見えるはずもない隣のクラスの方角、つまり背面黒板を見つめていたが、やがて「またか」という顔と声を出して肩をすくめてから、数秒間ストップした授業を再び進め始める。メンデルがどーのこーの、独立の法則がどーのこーの。

他の生徒も特に気にした様子はない。日常なのだ。どんなにおかしなことが起こっても——そう、例えばこの村ではバークトゥーミル星人が村長なのです、ですから村人は必ず一日一回バークトゥーミル星人の家に行って挨拶をしてこなければならぬのです——みたいなことがあったってその村の人たちにとっては日常なのだ。

だから他の生徒は気にしない。先生も肩をすくめるだけ。そういう問題児がこの学校にはいる。だが他の村人が慣れていてもその環境に適應できない人というのは必ずいる。漫画やゲームにだってよくいる。そういう人が大体キーパーソンになる。故に自分は彼女にとってのキーパーソン。

生物の授業が終わるまであと十五分。

学校の屋上への扉は普段は閉まっているが、必ず開いていると確信するときがある。

慎はドアノブを回し、屋上への扉を押し開ける。この扉に限って少し押すときに力があるから困る。予想通り、扉は開いて新鮮な空気が流れ込んできた。

屋上へと降り立つと、真っ青な空とその下に広がる山と海が飛び込んできた。

その風景に混じって、制服のスカートの汚れるのも気にせずタイル地の床に座り込んで紫煙をゆらめかせる背中がある。その背中のある金網フェンスの近くへと歩いていく。ドアの音で誰か来たことは気づいているはずなのに、彼女はそんなことも気にせずに下界に広がる現代的な町並みを覗き込んでいる。肩まで伸びている茶色があった髪が、風に揺られて色っぽく波打った。

隣に立つ。彼女は何も言わない。右手に持っていた煙草を携帯用灰皿に押し込むだけだった。

「煙草、未成年は吸うのは禁止なんだぞ」

まず何を言うべきか困ったが、当たり障りのない話題から切り込むことにした。

なんでこいつに話しかけるだけで緊張せねばならないのとか。

「別にいいじゃない」

「ほう、校則を無視するアウトローな奴だとは思っていたが、法律を無視するくらいのアウトな人だとは思わなかった」

「……うるさいわね。むしろくしゃするときだってあるのよ」

開いた右手を差し出すと、乱暴に煙草のパッケージを寄こした。慎はポケットの中にパッケージを突っ込みながら、

「で？ 今日は何があったんだ？」

「ゆーとーせー様に言うほどのことじゃないですよ。それより授業はいいの？」

「次の時間、日本史なんだよね」

「ああ……」

彼女はそれだけで納得したようだった。自分は日本史の大村が好きではない。だから一ヶ月に一回くらいは難癖つけて授業をサボる。今日は偏頭痛がするから保健室で休んでくると言ってきた。日頃どんなに真面目でいたって、どうしても相性が悪い教師と言うものがある。逃げるのは気に喰わないが、教室という土俵で生徒と教師が相撲をとったときの結果なんてたかが知れている。今後のために、優等生の皮はまだ被っておくべきであると考えた上での行動だ。

「数学の、なんだっけあいつ、そう谷口だ谷口。あいつ授業始まってからずっと私のこと睨んでくるわけ。睨んでくるだけならまだしもネチネチと女みたいにしつこく当ててきてさ。ムカついたからハケた。そんなに私を悪者に仕立て上げて何が楽しいのかしら」

谷口は悪く言えばいわゆる一昔前の頑固人間で、彼女——松原恵の態度が気に入らないのだろう。しかも彼女は頭がいい。そんなのが学年トップという事実にもしゃくしゃしているに違いない。

「気持ちには判る。けどま、お前の普段の態度も問題なんだぞ。もう少し自粛すればいいものの」

「冗談。私は我が道を行くの。学校だって本当は来たくて来てるわけでもないし。一応将来のために来てるけどさ、——人間、いつ死ぬか判らないんだから」

そう言って彼女はまた、目を遠くに向けてしまった。つられて自分も下界の町並みに目を向ける。

千波市の歴史は浅い。

海と山に囲まれた田舎なのだが、この町並みが納得できる事実として首を縦に振らせてはくれない。伝統的な田舎っぽい家などほとんどなく、都会の住宅街のような光景が広がっている。自分の家もそうだし、恵の家もそうだ。歩道はレンガでできているし、商店街もやたらパステルカラーな壁色が多い。町の中だけを覗いてみると田舎じゃない。町外れには教会だってあるし、巨大な総合病院だってある。極め付けがこの千波高校で、都市の学校にだって劣らない設備が施されている。

しかしこれには大きな理由がある。

慎は恵を見る。彼女の視線の先には未だ昔の町並みが見えているのか。

十年前の冬、大震災が起こったのだ。震源は海底だったが、大地震の影響で津波、崖崩れ、雪崩という連続した災害のおかげで当時の千波市住人の約三割は亡くなった。自分も恵も、この災害を経験し、生き残った数少ない人間の一人だ。

あの災害で、自分は兄を、彼女は両親を亡くした。国や地方の援助で生活には不自由していないものの、部屋の位置や、風呂の入れ方も判らない自分の家とは名ばかりの他人の家に放り込まれた当時の彼女の思いはどうだっただろうか。

今の慎にも恵にも、広く言えば震災を経験した人は、胸の中に一生消えることのないしこりがある。慎の家族、柳緑家はそのしこりを胸の奥へと隠すのが他の人より数手早かったので家の近い恵の面倒を良く見てやっていた。慎と恵の付き合いはここに起因する。

思う。

自分はこの災害を過去のものとできているけれど、彼女はできていないのではないだろうか。正直に言うと、千波の大震災前は恵と深い交流があったわけではなかった。だから比べることはできないけれど、あの日から彼女は誰にも心を開いていない。その「誰にも」には自分も含まれているのが悲しかった。推測するしかできないが、もしも彼女があの日から一歩も前へ足を踏み出せていないとしたら、

何もできない自分が歯痒かった。

「二人の物語」

三日が経った。

帰りのホームルームが終わり、さあ帰ろうかというときに慎は担任に声をかけられた。

なんでも、恵が三日連続で学校を欠席しているらしい。

「――本当ですか？」

今年先生に成りたて春野仁美二十三歳独身は困ったように頷いた。話を聞くとどうやら無断欠席で、家に電話をかけても誰も出ないらしい。困り果てた教師陣は、学年で唯一恵と親交のある慎に声をかけてきたということだ。

様子を見てきて欲しい、と。

内心呆れる。ここはそこその進学校で、不良が少ないからとはいえどんな生徒にも毅然とした態度で臨むのが教師というものではないのか。自分達でいけ、と言いたかったが、これからのためにぐっところえる。

それに、事実ならばおかしい。恵はどんなに学校に対して嫌悪感を持っていたても、無断欠席をするような奴ではない。態度を変えたといえればそれまでだが、何かあったと考えるのが普通だろう。

――男の勘が嫌な予感を告げていた。

彼女の家は自分の家の三軒先なだけなので、一旦荷物を置いてから彼女の家に行く。一人で住むにはおよそ似つかわしくない大きさの家は静まり返っていて、チャイムを鳴らしたが三分待っても反応がない。窓を覗こうにも緑色のカーテンが閉められているので中も確認できない。留守なのだろうか。

腕を組んで、ドアに寄りかかる。どうしよう、たまに屋上で雑談を交わす以外、恵と付き合いはないから彼女の行きそうな場所というものがない。

「こういうときに漫画だと大体ドアの鍵とか開いてるんだよね――」

半ば冗談のつもりだった。
開いていた。

「――え」

体がドアノブを握った姿勢のまま硬直する。状況を理解するのに時間がかかった。

ドアが開いているということは、鍵をかけないで出かけてしまったのか、……それとも、家の中にいるのか。家の中にいるのだとしたらなぜ何の反応も示さないのか。

何かあったのではないのか。

静かにドアを開いて家の中に入る。彼女の家には中学二年くらい頃から足を踏み入れたことはない。まっすぐ伸びる廊下は窓から光が入っていないせいしか外の明るさに比べて中は暗く感じた。

「おい、めぐみー？」

恐る恐る玄関から家の中に向かって声をかけてみるか、返事や足音どころか気配すら感じられない。どこかで寝ているのか、誰もいないのか、あるいは。

「お邪魔します……」

罪悪感を押し殺すように一人ごちてから、まづリビングを見たが誰もいない。

なかなか整理されているようで、芳香剤の甘い匂いがした。なんとなく三人くらい座れる大きなソファに腰を下ろす。少し彼女をうらやましく思った。

恵の行方を知らせてくれるものがないものと目を走らせると、ガラスのテーブルの上に開かれた回覧板が置かれていた。回覧板など普段見もしないが引き寄せられるように手にとって見る。

市民の皆様へのお知らせとあった。

十月に行われる町のお祭りに出すバザーの品物出店の募集――ゴミの出す曜日が火、木から月、金になりました――千波野球クラブ会員募集中――残念なお知らせですが千波第一公園の取り壊しが決定いたしましたし

目を戻す。

一震災の被害者である以上、昔の記憶は頭の後ろにこびりついている。だから千波第一公園と言う名称と幼い自分が呼んでいた「上の公園」は瞬時に結びつかない。けれど、上の公園は確かに、大震災が起こって町が新調されても残っている、数少ない今と昔をつなぐ場所だった。

そしておそらく、恵にとって幸せだった過去を思い出させる場所に違いなかった。

回覧板に場所が載っているが、そんなもの見なくても知っている。慎は、走り出した。

千波第一公園は名前だけは大そうなもんだが、見てみればベンチが二つとジャングルジムと球状でぐるぐる回る遊具と二人分のブランコしかない、小さな公園だった。しかしその遊具は震災前からあるものであり、周りが木で囲まれているので損傷をそれほど受けなかったのだろう、と町の人々から言われている。

すでに夕日が差し込む時間帯になっていた。

恵もいない。

誰もいない。

全速力で走ってきて、口では「あれ？」と言うものの、ちょっと考えればこの行動は短絡的思考だと気づくわけで。あの回覧板を見て彼女がこんなところも三日もいるはずないわけで。

要するに走り損だった。

体が熱くてだるくて苦しい。心臓の鼓動がいつもより大きくて手を当てなくても体で感じる。それがまた疲れを誘発する。悪循環だ。近くのベンチに腰を下ろして手足を力なく伸ばす。考えてみればいるはずないんだけど、ここにいると確信していた。

「全く……。どこに行ったんだか」

夕日が眩しいので左手で顔を覆い隠す。彼女はどこにいるのか。

なぜ自分はこんなに焦燥感に駆られているのか。

判らないことだらけだった。

「あれ？」

聞きなれた声がした。ベンチから跳ね起きて声のした方を見る。公園の入り口で、恵が呆けたように立っていた。

「珍しいね、慎がこんなところにいるなんて。ううん、初めて見るかもしれない」

見る限りでは、彼女は普通だった。いたっていつも通りの彼女だった。

「……三日も学校休んで、どうしたんだよ」

「え、何？ 心配して探しに来てくれたの？」

「いや、先生に言われたから」

「――あっそ」

空気を読み、と言わんばかりの目をしていた。

「あ、あとこれ」

慎は制服のポケットから鍵を取り出して恵へと投げる。我ながら綺麗な放物線を描くそれを彼女はこともなく受け取り、

「これ、私んちの鍵？」

「お前の家開けっ放しだったから、母さんに言って鍵借りてきた」

「あー……」

彼女は恥ずかしそうに頬をかく。そして、何も言わずに慎の隣に座った。

「どこ行ってたんだよ？」

「お母さんちの所に、墓参りに。まだ命日には少し早いけど」

命日とはすなわち、大震災が起こった日。

「そうか」

「でも慎がここにいるとは思わなかったわ。よく私がここにいるかも、とか思ったわね？」

「……家の中に不法侵入しました。ごめんなさい」

「は、恥ずかしいなあ……。で？」

「回覧板を見た」

「すごいすごい、それだけで私の行動パターンを読むなんて」

ぱちぱちぱち、と数回拍手にもならない拍手が公園に響いた。

やがて拍手の音はやみ、公園に再び静寂が訪れる。虫の鳴く声がやけに遠くに聞こえる。どこかの家で誰かの声が、テレビの音が聞こえてくる。

「――正解だよ」

恵がうつむいて呟いた。

「多分、慎の考えてることは、正解」

冗談の言える空気ではなさそうだった。

「あの回覧板、三日前には届いてたってことか？」

「うん」

「後の人、困るぞー」

「大丈夫、私で最後だから。あとは元の人に回すだけ」

彼女は口元だけで笑う。髪で隠れて顔全体の表情は読み取れなかった。

「あのさ、俺の考えてることは、正解なんだよな？」

彼女は頷く。

「あの回覧板を見て瞬時にここに来たってことが一つの決め手かもね」

慎は、恵の頭にぼん、と手を乗せて頭を撫でてやる。

普段の恵だったら馴れ馴れしいとか言って振り払っただろうが、黙ってその手の熱を受けていた。

一人で生きる強さを持っているつもりだった。

自由に生きていると思っているつもりだった。

それが、蓋を開けてみればなんだ。私はただ過去に囚われていただけだ。

過去を過去として受け止めることが出来ず、あの出来事が今もすぐ隣にある。

私の自由の翼は、過去と言う名の領域の中で広げていたに過ぎな

い。

「回覧板でこの公園がなくなると知ったときね、お父さんとこの公園でよく遊んだ思い出が急にフラッシュバックして、何もやる気が起きなくなっちゃったんだ。で、二日間ボーっとして過ごして今日まずやろうと思ったことが両親の墓参り」

なぜ行こうと思ったのかは自分でも良く判らない。彼には判らないと思うけれど、今日この日まで、私は墓参りに行ったことがなかった。つくづく親不孝な奴だと思う。同時に、なぜ今日まで墓参りに行くという選択肢が自分の中に存在しなかったのが不思議でならない。

「判るなあ、その気持ち」

意外な慎の言葉に、恵は心を読まれたと焦った。

そんな彼女の焦りに気づかず、慎は彼女の頭を二回ぽんぽん、と叩いてから腕を組む。

俺も兄貴をなくしたときそんな感じだった。救助されたときの記憶ないし、気がついたら病院の簡易ベッドの上だったから兄貴の死体も見なくてさ。兄貴がいなくなった、っていう認識がなかったんだよね」

慎は老人が昔話をするように、目を過去へと馳せながらゆっくりと、ゆっくりと話す。

「まあ俺は恵よりひどくなかったからさ、墓参りにも慰霊祭にも毎年行ってたんだけど、小学校五年くらいまでかな？ 兄貴の死は理解してたつもりだけどあのお墓が兄貴のものだとは思わなかった。自覚したのは、年末の大掃除で俺の部屋から兄貴の日記帳を見つけた時だった」

いつからかあったのかは判らない。

普段は読まないような分厚い本と本の間にノートが挟まれている。ノートと共にあったものは読んでほしいという意味か。

大晦日、未だ慣れない自分の部屋のいらぬものを片付けていたから、天井まで届く本棚の、一番下の段の百科事典をなんとなく取

り出してみる。

引き出した三巻と一緒に、ノートが零れ落ちてきた。大学ノートだ。

表紙をめくる。息を呑んだ。書かれていたのは日記で、字体からして兄のものだったからだ。兄は几帳面な性格ゆえに、夏休みの絵日記を延長して大学ノートに毎日数行その日の出来事を綴っていた。今年で同じ年になった自分はぐうたらな生活をしているのに、兄のなんと真面目なことか。

「一ページずつ読み進めてく。小五の日記だし、内容は些細なものだったよ。好きな子の仕草とか、友達や俺とのケンカとか、食事のメニューとか。でもね、ノートの半分を過ぎたあたりから、ないんだよ。あの日から、十二月十六日から」

言葉を通して自分は日記を見つけた日にタイムスリップしている。魂が抜けたようだ。疲れではない。胸の中にある何色かも判らない塊が溶けてなくなった副作用。

「そのとき初めて、ああ、兄貴は死んだんだなあ、って思った」
理解はしているつもりだった。

恵の瞳にはいつの間にか涙が溢れていた。実のところは判らない。単純に忘れていただけなのかもしれないし、今日墓参りに行ったのだったまたまだってのかもしれない。

それでも私は、泣かないわけにはいかなかった。
判ってしまったから。

両親はもういないということに。

一人で生きる強さなど必要なかったことに。

「私は……」

恵は、掠れた声で自分に言い聞かせるように、一言を丁寧に言う。
「一人で生きるのは嫌なのかもしれない」

慎は恵の肩を抱き、自分の方へと引き寄せた。

「…でも…ね」

言わなければならぬ。目が涙で曇っても、体中が暑くても、頭

の中がぐるぐる回っていても、この言葉を紡がない限り私は過去から開放されない。

言うんだ恵。泣いているんだから嗚咽が漏れるのはしょうがない。でも。

「も……だれかが、しぬ、は、いや、な」

もう誰かが死ぬのは嫌だ。すぐ傍にいる人が死ぬのは嫌だ。

無意識にそう思っていたからこそ、今まで私は一人でいたのだ。

あの震災を経験しているからこそ、親しい誰かが私より早く死ぬのが嫌だから。

一人は嫌だけど、誰かを失って悲しむくらいなら、一人でいたほうがずっといい。

「えらいえらい」

慎は恵を抱き寄せた手で頭を撫でる。

それがどうしようもなく恥ずかしくて、腹立たしくて、嬉しい。

「恵は俺と違ってデリケートだからな。震災の傷を引きずっててもしょうがないさ」

「うん」

慎は言葉を選ぶように口ごもったりそっぽを向いたりしていたが、

「――俺がさ、傍にいてやるから」

安心する。さっきみたいな嗚咽はもうしないけど、涙が止まらない。

「うん」

「いてやるから、授業サボったり、煙草吸ったりするの禁止な」

なんて雰囲気ぶち壊しな発言だろう・

「あと、友達作れよ」

「……うん」

慎は小指を差し出す。恵はその小指に自分の小指を絡ませる。

恵は笑う。心から笑うことを忘れた彼女の見せる、数年ぶりの本心からの笑顔。

――ゆーびきーりげんまん、うーそついたらはーりせんぼんのー

ます――

二人の声が、公園に、町に、夕暮れの空に、響く。

その後二人は、様々な人を巻き込んで高校生活に華を添えていきますが、

それはまた、別のお話。

「二人の物語」 (後書き)

長々とありがとうございました。
感想もらえたら、少しうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4125b/>

あの空の下で

2010年10月8日15時36分発行